

聖書日課 『からし種』 2025.1.12-1.19

<p>1月12日 (日)</p> <p>ミカ 4章</p>	<p>「多くの国々が来て言う。『主の山に登り、ヤコブの神の家に 行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道 を歩もう』と」(2節)。わたしたちは、自分が歩むべき「道」が見 えているだろうか。その「道」を歩むための確かな「羅針盤」を 持ちえているだろうか。「わたしは道であり、真理であり、命で ある」(ヨハネ 14:6)と語られた主に聴く信仰を求めて。</p>
<p>13日 (月)</p> <p>ミカ 5章</p>	<p>「エフラタのベツレヘムよ／お前はユダの氏族の中でいと小さ き者。お前の中から、わたしのために／イスラエルを治める 者が出る」(1節)。ユダの中で最も小さなベツレヘムにメシア 預言が成就するのは約七百年後のこと。しかしその間、主なる 神は休んでおられたわけではない。「いと小さき者」に慈しみを 注ぎ、励まし用いられる主の御業は決して絶えることがない。</p>
<p>14日 (火)</p> <p>ミカ 6章</p>	<p>「人よ、何が善であり／主が何を前求めておられるかは ／前前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し／へりく だって神と共に歩むこと、これである」(8節)。主なる神が私た ちに何を求めておられるかは聖書に明確である。今日のわた しの祈りが、「わたしの願いの成就」を求めるだけで終わらず、 「神の御旨」につながる祈りに変えられていきますように。</p>
<p>15日 (水)</p> <p>ミカ 7章</p>	<p>「わたしの敵よ、わたしのことで喜ぶな。たとえ倒れても、わ たしは起き上がる。たとえ闇の中に座っていても／主こそわ が光」(8節)。主イエスが神の国を宣教し始めた時、世界は 変えられた。「神の国はまさに地上の暗闇のただ中に、諸民 族を覆う暗黒のただ中に射し込んでくる光であろうとする」(テ ィーリケ『主の祈り』)。この「神の国」に照らされる者とされて。</p>

聖書日課 『からし種』 2025.1.12-1.19

<p>16日 (木)</p> <p>ナホム 1章</p>	<p>「(主の)道はつむじ風と嵐の中にあり／雲は御足の塵である」(3節)。ナホムは当時の世界で全盛だったアッシリア(首都ニネベ)に対する神の厳しい裁きを語った預言者。経済力と軍事力を誇る国は「大国」と呼ばれ、「大国」に属する人々は自分も「大きな存在」であるかのように錯覚する。が、神の前ではそのような驕りと錯覚は一瞬で吹き飛ばされる。</p>
<p>17日 (金)</p> <p>ナホム 2章</p>	<p>「見よ、良い知らせを伝え／平和を告げる者の足は山の上を行く」(1節)。ナホムはアッシリアが神の裁きに服することを「良い知らせ」と呼んだ。私たちは十字架の主が成し遂げられた神の和解の御業を「良い知らせ」として受け取り、隣り人と「平和」を分かち合うよう招かれている。主よ、今日、私を用いて、誰かと「良い知らせ」を分かち合う者とさせてください。</p>
<p>18日 (土)</p> <p>ナホム 3章</p>	<p>「災いだ、流血の町は。町のすべては偽りに覆われ、略奪に満ち／人を餌食にすることをやめない」(1節)。もし今日の世界にナホムが生きていたら、どのような神の言葉を取り次ぐだろうか。聖書の人々の姿は、私たちを映す鏡のよう。私たちの心の向きが偽りから真実に向けて百八十度変えられることを願い、神の独り子は飼い葉桶の中に生まれてくださった。</p>
<p>19日 (日)</p> <p>ハバクク 1章</p>	<p>「あなたは人間を海の魚のように／治める者もない、這うもののようにされました」(14節)。預言者はどこかの海辺で、網に集められる魚たちを眺めながら、苦難の民の姿をそこに重ねていたのだろうか。ガリラヤの海辺に立ったイエスの「人間をとる漁師にしよう(マタイ4:19)」の招きにより、海の魚のたとえは救いに集められる幸いのたとえに変えられた。</p>